伏見(ふしみ)いにしへは隴々たる野径にして、ところ〴〵に民村あり。秀吉(ひでよし)公御在城より大名屋舗諸職工人賈人軒端をつらね、町小路に市をなし、都へ貨物を通じて交易をなしけり。〔野山里沢田など故人和歌に詠ず〕

山

新　古　ふし見山松のかげより見わたせば明る田面に秋風ぞふく　俊　成

新後撰　哀にも衣うつなりふし見山松風寒き秋のね覚に　慈　鎮

里

新　古　夢かよふ道さへ絶ぬ呉竹のふしみのさとの雪の下折　有　家

新　勅　朝戸明てふしみの里をながむれば霞にむせぶ宇治(うぢ)の河なみ　俊　成

玉　葉　荒にけるふしみの里の浅ぢ原むなしき露のかゝる袖哉　式子内親王

野

新続古　女郎花花の下紐うちとけてたれとふしみののべに咲らん　藤原道信

田　井

新　千　呉竹のふしみの田井のかりのよに思ひしらでや守明すらん　読人しらず

あひしりて侍ける人の、伏見にすむと聞て、尋まかりけるに、庭の草道も見えずしげりて虫の啼け

れば

玉　葉　　分て入袖に哀をかけよとて露けき庭に虫さへぞ鳴　　西　行